

プロジェクト題目
ひつじジャック
～アートで地域を盛り上げよう～
についての報告書

教育学部
芸術文化課程
造形芸術コース
富永 麻祐子

『ひつじジャック～アートで地域を盛り上げよう～』報告書 目次

目次

1 “ひつじジャック”プロジェクトの実施状況

1-1 本プロジェクトのねらい

1-2 本プロジェクトの企画、立案の経緯

1-3 調査・研究計画とその変更点

2 ワーク・ショップについて

2-1 ワーク・ショップの実施状況

2-2 アート(造形)という視点から見た羊について

2-3 地域という視点から見た羊について

2-4 子どもという視点から見た羊について

3 当プロジェクトのねらいの達成状況

3-1 ねらいについての達成状況

3-2 まとめ

1 “ひつじジャック”プロジェクトの実施状況

1-1 本プロジェクトのねらい

本報告書は2010年2月28日にとべ動物園で開催したワーク・ショップを含むプロジェクト“ひつじジャック”の実施状況の報告を述べるものである。

本プロジェクトのねらいは以下の4点である。

- (1) 地域文化の活性化
- (2) 様々な世代間の交流をはかる
- (3) アートを身近に感じてもらう機会を提供すること
- (4) 地域の問題を解決するきっかけ作り

(1) 地域文化の活性化について

地域の特産物である「今治タオル」を素材に使用することで、そのよさを改めて見直す機会を作る。そして、アートという今までにない形で今治タオルを使用することで、若者層にも自分たちの地元文化について考えるきっかけにしたい。

(2) 様々な世代間の交流について

アートの制作段階を体験する参加型のワークショップを地域の人々に向けて開催する。そこで一緒に制作を行うことで、様々な世代間の交流をはかり、アートを通して、人と人が関わるきっかけをつくる。

(3) アートを身近に感じてもらう機会を提供することについて

「松山で現在より多くのアート・イベントを開催し、アートを身近なものとして感じてもらいたい」という企画者とその周辺のアート関係深い人が望んでいることを実現する機会にする。作品を人がたくさん集まる大街道（計画段階での開催希望場所）に設置することで、あまりアートに関心がない人にも、日常的な空間でアートに触れ、身近に感じてもらう機会となる。

(4) 地域の問題を解決するきっかけ作りについて

地域の問題である大街道の自転車の乗り入れ、無断駐輪を解決したい。道に作品を置くことで、自転車の乗り入れを防ぎ、大街道にアート空間を作り出すことで、自転車を放置しにくい環境作りを提案する。

上記4点を目標とし、アート・イベントを開催して、イベント終了後、アンケートなども行い、またどのような効果が実際現れたか調査・研究を行う。その結果についてまとめたパネルの製作を行い、展示したいと計画した。

1-2 本プロジェクトの企画、立案の経緯

本プロジェクトグループ（愛媛大学教育学部芸術文化課程造形芸術コースの学生4名、学校教育教員養成課程美術教育専修の学生2名）は、美術を専攻しており、アートがどれだけの人に、どのような効果を与えることができるか研究している。アート・イベントが少ない松山で、学生ならではのアート・イベントを企画し、地域を盛り上げたいという思いが本プロジェクトの動機である。そして、平成20年後学期の「総合演習」の授業において、「地域とアート」をテーマとした学習・研究を行い、アート・イベントを企画した。授業期間中ではアート・イベントの実施までに至らなかった経緯もあり、授業終了後もその実施に定期的集まり実施に向けて取り組んだ。運良く、平成21年度の「学生プロジェクト」に採択されることになり、「わたしたちのアート・イベント」が実現できたのである。

本プロジェクト“羊ジャック”の概要を簡単に述べると当該学生が“地域”、“アート”、“子ども”という3つのキーワードを基に立案したねらい(1)、(2)、(3)、(4)の実現にある。ねらいがいかかに実現したかについては次の章で明らかにする。

では、立案にいたる経緯を説明する。企画者としての当該学生が第一のキーワードであるアートという視点から地域を捉えたためアプローチ方法は専門性を活かした造形的活動とした。さらに、第二のキーワードである地域という視点で捉えた場合、松山市では体験型のイベントが少ないことからワークショップ形式のイベントを企画、実施するものとした。加えて、地域という視点で捉える範囲を拡大し、愛媛県という視野で企画のコンセプトを考えたため全国的に知名度のある今治産タオルを造形素材として使用したワーク・ショップとした。

企画名“羊ジャック”とは第三のキーワードである子どもが本企画に親しみやすいイメージを持つことが出来るよう羊というキャラクターを設定したものであり、タオルの材質感と羊の毛の質感が類似していることも設定の理由である。ジャックとは一般的に占領することを意味するが、羊が持つ穏やかでかわいらしいイメージに欠けるインパクトをねらって用いたため戦闘的な意味を持つものではない。

1-3 調査・研究計画とその変更点

①メンバーによる企画会議：本プロジェクト採択以前から毎週水曜日の午後を基本として会議・作業を行った。4回生を中心とするメンバーであったため、教員採用試験や就職活動、卒業研究により計画通りに会議や作業を進めることができなかった。

②地域特産物「今治タオル」調査：平成21年7月から9月にかけて一広タオル株式会社とタオル美術館を訪問し、本プロジェクトへの協力依頼を行った。快諾をうけ、処分品となるタオル材30kg程度を提供していただいた。

③大街道管理団体を訪問：地域問題について調査、対策を話し合う。本プロジェクト採択以前から、本プロジェクトへの協力依頼をお願いし、大街道商店組合としての理解を得ていた。安全対策について調整を行ったが、安全を確保するための人員確保等、解決が困難な状況が続き、やむを得ず開催場所を変更することになった。

④小学校訪問：ワークショップへの参加交渉を行う予定であったが、本プロジェクトのメインとなる大街道商店街での実施に見通しがつかなくなったために、小学校へ訪問する機会を逃した。

⑤ワークショップに向けての制作準備：一広タオル株式会社とタオル美術館より、タオル材を提供していただき、「ひつじ」の試作に取りかかることになった。木材での骨組みに布地を巻き付けタオル材を張っていく方法や、アルミ材で骨組みを作りウレタン材で肉付けを行って表面にタオル材を張っていく方法などを試した。試作作業をしながら、ワークショップでの市民の参加方法を協議する中で、タオル材を多くの人に貼ってもらえるとようなものにしたいという共通認識を持つようになった。したがって、ひつじ本体は簡易なもので、貼りやすいものにすることにした。本体の素材は段ボールで制作し、タオル素材を貼っていくことで視覚的に柔らかさや丸みを強めていくように、本体そのものの形は、頭や胴体を立方体や直方体を組み合わせたものに、足は円柱形のものとした。

⑥地域住民にむけてのワーク・ショップの開催：上述のように大街道商店街での開催が困難になり、他の会場を探すことになった。「多くの人が行き交う場所」「安全対策が自分たちではかれる場所」が最低条件となる。大学内でのワークショップ開催も案には出たが、地域の人々の参加を期待することが難しかった。その状況の中、プロジェクトメンバーの一人が愛媛県立とべ動物園で卒業研究の一環でオリエンテーションマップのシミュレーションを行っていた。その関係から今回のプロジェクトへの協力を依頼し、動物園側の快諾を受け、とべ動物園でのワークショップ開催に変更した。詳細については次章で述べる。

⑦パネル作成

ワークショップ会場が大街道商店街から愛媛県立とべ動物園に変更になったことをうけ、パネル作成に関しても若干の修正を行った。パネルの展示場所や内容を協議した結果、展示場所は愛媛大学教育学部本館4階リフレッシュルームとし、パネルの構成も本学学生が見ることを意識し、学生プロジェクトとして成果を写真等を多用し視覚的に説明するものとした。

⑧ワークショップ作品を大街道に展示、イベントの開催

上述のように、展示場所を変更した。展示と同時期に見にワークショップを開催する計画であったが、卒業研究や企業研修等の時期と重なり、ミニワークショップ等のイベントを開催することができなかった。

⑨アンケート、事後調査を行う：ワークショップ開催時の参加者に聞き取りでアンケート調査を行った。「動物園でこのようなアートイベントに参加できるとは思わなかったが、家族でアートができて楽しかった」(20代女性)、「アートが何かよくわからないけれど、楽しかった」(30代男性)など、アート・イベントに対する好意的な感想をもっていた。

⑩調査結果をまとめ、プレゼンテーションを制作、発表：本プロジェクトに関するプレゼンテーションはメンバーで唯一の3回生であった学生に頼ることになった。

2 ワーク・ショップについて

2-1 ワーク・ショップの実施状況

ワークショップ実施は、平成 22 年 2 月 28 日に愛媛県立とべ動物園（以下、とべ動物園と略称）の職員の皆様にご協力いただき、実施した。本章ではこの報告を行う。

まず、本ワークショップの概要を説明したい。本ワークショップでは、羊型のモニュメントを二体用意し、動物園内の一角に設置する。そして、来場者にワークショップの参加を呼びかけた。ワークショップ参加者が行うことは、今治タオルの小片（約 3 cm 四方）を木工用ボンドで本体に貼り付けることで羊のモニュメントを彩り、1 つの共同作品を制作することである。

ワークショップ当日、とべ動物園には休日ということもあり多くの来場者が訪れていた。当日の来園者数は 4,706 人である。その中でも殆どが親子や家族など子どもを中心とした来場者であった。当日のスケジュールを簡単に確認しよう。

9:00 とべ動物園開園・材料搬入

9:30 羊モニュメント設置、ワーク・ショップ開始

15:30 ワーク・ショップ終了・搬出

途中、園内アナウンスで参加者を募った他は、6 時間の間交代で 5 人のメンバーが来場者に呼びかけ、参加者を集めた。はじめの 15 分ほどは参加する人数が伸びなかったが、それ以降は常に 1 台の羊モニュメントの周りで 5 人から 10 人ほどの子どもが制作するという状況であった。参加者の年代はその場での聞き取りの結果、子どもが幼年期から学童期の児童が多数、また数人であるが高校生の生徒も参加してくれた。子どもと同伴で園に来場した保護者の多くが子どもとともに制作に参加してくれた。その中の大半は、子どもがタオル小片を貼付する際の補助と見守りであった。これらのまなざしも作品の雰囲気大きく影響したものと思う。

以下では、本ワークショップを行った際に得た特記すべき事項を記していきたいと思う。

2-2 アートという視点から見た羊のについて



図1 ワークショップでの完成した作品

上の図1は完成したばかりの羊型モニュメントの写真である。2体ある羊のどちらも色とりどりで多くのタオル小片が前面に張り巡らされているのが分かる。この様に多くの欠片を貼り付け全体を構成する造形的手法は、均一にそれを並べるモザイク画や、画面を隙間なく埋めるちぎり絵と共通のものである。しかし、本ワークショップの独自な点として、それを立体造形に用い、かつタオル素材を使用したところにある。前面に貼ったタオルの質感がその他の描画材を用いることでは為し得ない柔らかい視覚的印象を見る者に与える。

また、色彩に関して述べると彩度(色の鮮やかさ)が高く通常の描画材では派手すぎる色が隣り合う部分が多く見られるのだが、先に述べたことと同様にタオルの質感が見る者にもたらす不快感を取り除き、調和をつくっている。しかし、それぞれの形については多くの課題を残している。まず、四角に切ったタオル小片であるが、その一枚の大きさや形、用意する色の数を変えることでこれらの視覚的な存在感は変化する。また、予定では頭や足の部分への貼付を参加者はしないと考えていたが、それらへの貼付を好む子どもの実態があった。頭や足の黒い部

分と胴体に貼られたタオル材のコントラストの面白さを考えていたが、偶発的に生まれた動作かも知れないが、予想を超えたダイナミックなアートになった。これらの点に関しては、今後同様の共同制作に取り組む場合の視点となるであろう。

2-3 地域という視点から見た羊について

地域という視点から羊を見た場合、達成された効果とこれから達成されるべき効果がある。1-2の企画立案の経緯で述べたとおり、松山市には体験型のイベント、特にアート・イベントが実施される機会は稀である。この点、実際に地域の中で当該学生が人々と一つの作品を共同で作り上げたことには既に達成された効果が存在する。それは愛媛、松山という地域の動物園という“場”と共に先に述べた造形的独自性を持った作品は存在したということだ。

このことは四国、日本(場合によっては世界)という規模で見てもその独自性を基盤に表現活動が今後可能であることを示している。ここで、一点確認すると、一般的に“アート”という言葉は今日、それが指し示す内容が多義的、多元的であり、単一に定義することが難しい。しかし、それを逆手に取る事もできる。それはイベントを企画する主体がイベントを実施しながらその内容を参加者とともに構築していくことが可能という事だ。羊は地域の人々の歴史、ものがたりの中を確実に歩み始めたのである。

つまり、言葉を代えると今後、この小さな歴史、ものがたりを引き継ぐ活動のあり方次第で羊の生み出す効果はさらに高まる、ということだ。今や“ひつじ”という平仮名の単語は本ワークショップを行ったことで松山市(愛媛県)、とべ動物園、タオル、動物の羊というイメージを人々の間でつなぐ事が可能となったのである。本章と前章では、ワークショップの内容についてアート、地域、という視点から省察、検討をしてきたが、この二点の視点は本ワークショップで制作された“羊”の独自性の基盤として密接に関わり合っている。さらに、以下では地域、アートという視点から見た関係をさらに強化する第三の視点から本ワークショップを見ていこうと思う。



図2 ワーク・ショップ時の制作風景

2-4 子どもという視点から見た羊について

本項で示す第三の視点は“子ども”である。この視点から見た羊の存在は、3点の視点の中で最も大きな今後の可能性を示すものであった。以下ではこの点について段階に分け、整理しながら論じていく。

まず、参加した子どもの年齢、発達段階という点から整理すると、制作開始当初はタオル小片を思い思いの場所に貼る、それを並べてできた模様を楽しむ、という子どもが多数であった。(図3)

加えて、それ以外に自分の発想で図像的なモチーフを作る子どももいた。(図4)これは様々な発達段階の子どもが共同制作に取り組む場合の質的に豊富な表現が表れる面白さである。



図3 子どもが思い思いに貼った状態。



図4 自分の発想で図像的に貼った状態

また、制作後半で注目したいのは羊というキャラクターについてである。これについて整理すると、どの年代の子どもにとってもワークショップを親しみやすいものにしただけでなく、制作の上で発想することに大きく働きかけた。キャラクターは顔を持つ。その表情を作り始めた時に制作は単にタオル小片を貼り付け、並べる活動から二匹の羊を作るといい、全体で一つの質を持つ活動に変化した。図5を見ると、羊の後部中央には尻尾があることが分かる。また、図6を見ると目、鼻、口を表現していることが分かる。これが複数の子どもの手によって変わってゆくのである。口から延びた舌のように見える部分は制作が進むにつれて、象の鼻の様になっていった。制作後半に入り、彼らがこの羊に対して様々な思いや印象を持ったことが直接の聞き取りから分かった。時に羊であり、象であり、ラクダでもあった。このように多様な発想を得る上で動物園という地域の中の場と羊というキャラクターは、合致したと言える。これが多くの子どもが制作に関わることになった要因と考える。今後も継続してこのような羊、というキャラクターを用いることは制作の上でも大きな可能性を示すものである。



図5 尻尾つける様子

図6 顔の表現をしている様子

さらに、地域という視点と関連して、本ワークショップによって、世代が異なる人々が関わりを持つ、というねらいから整理してみたい。このねらいは、ほぼ達成したと考える。なぜなら、木工用ボンドでタオル素材を羊に貼りつける際には、子どもの年齢、特性によっては困難な場合(図7)がある。そこで図8のように大人が手を貸すことで制作がスムーズになる。これについては本ワークショップでは、大人が学生と保護者であったが、場を変えて行う際にはこの大人のまなざし、補助を視点に対象の人々を広げればさらに制作を活動的にする可能性を持っている。



図7 子どもだけでボンドを扱う様子



図8 大人が日除する様子

以上、本項では子どもという視点からワークショップで実際に共同制作することで見えた可能性について整理した。本章全体では地域、アート、子どもという3点の視点から当ワーク・ショップを整理し達成された効果と今後達成されるべき効果と可能性について検討した。以下、次章ではこれらの効果と照らし合わせ、プロジェクトのねらいの達成状況を検討、整理し今後の活動の見通しを立ててみたい。

3 本プロジェクトのねらいの達成状況

3-1 ねらいについての達成状況

(1) 地域文化の活性化については、地域という視点から見た今治タオルの良さを改めて理解し、見直すことができたと考える。これは2-2でも述べたとおりワークショップで造形的独自性をもった作品を市民参加のもと作り上げたことが重要な要因である。参加者が作品の制作に魅力を感じなかったのであれば、以上で述べたような作品は完成していなかったであろう。

また、若者層にも自分たちの地元文化について考えるきっかけにしたいという点については、概ね達成できたものとする。先にも述べたとおり、参加者の多くは幼年期から学童期の児童やその保護者であった。彼らが今治タオルを使った活動に参加したことは地元文化を考えるきっかけになったと思う。しかし、我々が本来「若者層」と捉えていたのは、10代後半から20代前半の若者である。開催場所の状況としては、若者層をターゲットとすることに無理があったと反省すべき点である。

さらに、(2)様々な世代間の交流についての達成状況は、前章の後半で述べたとおり、達成した部分とそうでない部分とある。子ども間での交流は活発に行うことができたが青年や大人、老年期の参加者は数が少なく、あまり達成することができなかった。そのため、今後さらに活動を展開する場合は場所を変えることで本ワークショップとは異なった年齢層の参加者による交流が期待できる。

また、(3)アートを身近に感じてもらう機会を提供することの達成状況についてであるが、アートを身近に感じてもらう機会を提供すること、これも達成できたと考える。

4点目のねらいとして(4)の地域の問題を解決するきっかけ作りについてであるがこれは計画の変更でも述べたように、成果をあげることはできなかった。以上、本項では4点のねらいの達成状況と今後の見通しについて前章までの検討を基に整理した。

3-2 まとめ

本報告書は三章の構成とし、第一章では“ひつじジャック”プロジェクトのこれまでの実施状況を振り返り説明した。第二章ではワーク・ショップについて3点の視点から整理した。第三章では当プロジェクトのねらいの達成状況について今後の見通しを含め整理し、論じてきた。第二章で述べたようにこのプロジェクト

の中でもワーク・ショップは今後を見通す上で大きな可能性を示すものであった。課題として残った事項も多くある。特に重要な事項だけここに記しておきたい。一点挙げると、今後は参加型アートとしての性格をより高めてゆくことだ。これはこのような参加型のアート・イベントにおいて活動を継続することで徐々に地域住民への周知、理解が広がりその性格を持ったイベントの開催が可能となるものとする。本報告書の内容は以上で全てである。

